

第1章 史跡の概要

第1節 茅野市と史跡の概要

1. 茅野市の地理的概要

茅野市は、日本列島本州のほぼ中央部、長野県南東部の諏訪地域に位置する。

諏訪地域は、諏訪湖を中心に南アルプス北端の西山山塊、霧ヶ峰西麓に囲まれた盆地地形に北側から岡谷市、下諏訪町、諏訪市が所在し、八ヶ岳と南アルプス山塊の山麓部には北側から茅野市、原村、富士見町が位置している。

北側には八ヶ岳連峰を隔て佐久地域と接し、南側は南アルプス連峰を隔て伊那地域、諏訪湖を経て塩嶺峠を越えると松本地域へ、南アルプスに沿う糸魚川・静岡構造線の大きな地溝帯を南東側に下ると、山梨県北部地域に接する位置環境にある。このように山塊に囲まれながらも、峠を越えれば東西南北につながる地理的環境にこの地はある。

諏訪地域のほぼ中央に位置する茅野市は、八ヶ岳西麓、蓼科山麓から諏訪湖に流入する上川・宮川が形成した沖積段丘・沖積低地と、八ヶ岳の火山活動により形成された山麓台地、霧ヶ峰南麓等に形成される扇状地・崖錐地などの様々な地形から成り立っている。

2. 史跡の位置

尖石遺跡は、八ヶ岳火山活動により形成された広い山麓の西域に位置する。尖石遺跡は八ヶ岳西麓のほぼ北側に占地し、標高1,050mから1,070mと縄文時代中期遺跡の中でも高い標高の山麓部に位置する。遺跡は茅野市の東部、豊平地区にあり、隣接する湖東地区・北山地区と併せて古くより「北山浦」と呼称され、縄文時代中期集落の集中する地域として著名である。

現在、市域には「北山浦」を中心に230ヶ所以上の縄文時代の遺跡が確認され、それらの多くが縄文時代中期に所属する遺跡で、その代表的な遺跡が尖石遺跡である。

尖石遺跡は茅野駅から東側へ八ヶ岳連峰に向かい約8km離れた、八ヶ岳山麓特有の尾根状台地に位置する典型的な縄文時代中期の集落遺跡である。

(守矢昌文)

第2節 史跡指定に至るまでの経緯

1. 江戸時代の尖石周辺の様子

江戸時代、享保18(1733)年に編纂された『諏訪藩主手元絵図』(文献:1)によると、尖石遺跡一帯の台地上は「原」、谷部は「田」と記載され色分けされている。この「原」は入会地、南大塩村の共有地として専ら肥料用の草類・飼料用の稗^{まぐさ}、屋根の萱・薪炭林・建築用材等を得るための場所として豊平地区特に南大塩村で管理していた場所である。

尖石遺跡周辺一帯を「広見」と称し共同採草地として利用されていたようで、「広見」の名称が示すとおりこの地域一帯は、広々とした原野が広がっている地域であったことがわかる。なお、草の成長を促すため



第1図 国特別史跡 尖石器時代遺跡位置図 (1/50,000)

第1章 史跡の概要

水を掛けた`水掛、の名称も字名に残されている。

2. 明治期以降の開墾と尖石遺跡の調査史概要

明治期養蚕業が諏訪地域で隆盛すると、明治25(1892)年頃から尖石周辺の共同採草場が個人所有地として分割され、分割された採草場は桑畑として開墾されるようになり、この開墾に伴い縄文土器や石器が出土している。第3章調査の歴史の項目で仔細については述べるが、明治26(1893)年当時、東京高等師範学校学生であった小平小平治が、遺物採集地として紹介した頃、ちょうど原野が開墾されている最中であったと考えられ、小平の報告が尖石遺跡を考古学界に紹介する嚆矢となっている。

当時尖石遺跡は`南大塩ノ遺跡、`広見、と称されていたようで、`尖石、の名称は大正12(1923)年鳥居龍蔵『諏訪史』第1巻の中で取り上げられ、その後遺跡名として定着している。

縄文時代中期の豪華な土器が採集できる遺跡として著名となった尖石遺跡には、小平小平治の実弟で俳人として活躍していた小平雪人や、昭和4(1929)年には`考古学の宮様、と呼ばれた当時学習院大学在学中の伏見宮博英王が発掘調査に訪れるなど、縄文時代中期の遺跡としての知名度は高まり、特に伏見宮の調査を手伝った宮坂英式に大きな影響を与え、その後の宮坂英式の人生を決定づけたといっても過言でない大きな画期となった。

昭和4年以降、宮坂英式による調査は、蚕糸業の衰退と共に進められた桑畑の畑地への改変と歩調を合わせるように、遺物の発掘、炉址の発掘、竪穴住居址の発掘へと進められ、その成果は中部地域で初めての本格的な縄文時代中期集落の発掘調査となった。この発掘調査の成果は「高原地における石器時代の集落地を示すものとして著名である」とし、昭和17(1942)年国史跡に、昭和27(1952)年には縄文時代の遺跡として最初の特別史跡に指定され、縄文時代集落研究の原点となっている。

遺跡北側に谷を隔て隣接する与助尾根遺跡の発掘調査が、宮坂英式等を中心に昭和21(1946)年から昭和25(1950)年にかけて行われ、28軒の竪穴住居址が調査され、ほぼ縄文時代中期の集落の全容が明らかにされた。その後尖石遺跡と関連性の高い遺跡として、縄文時代中期の生活域であったと考えられる谷部と谷を隔てた与助尾根遺跡も含めて平成5(1993)年国特別史跡に追加指定された。また、令和3(2021)年3月尖石台地の南側に位置する谷部、尖石下と称し昭和14(1939)年宮坂英式が小平喜代士所有地を調査し、尖石遺跡の水場と類推した谷部と、尖石遺跡と与助尾根遺跡を隔てる谷部湧水点谷頭を縄文時代中期集落の水場を考える上に重要な地区として令和3(2021)年再追加指定を受けた。

(守矢昌文)

参考引用文献

(文献:1) 諏訪史談会 昭和61(1986)年1月「南大塩村」『諏訪藩主手元絵図』87・88頁

(文献:2) 鳥居龍蔵 大正13(1924)年12月「一〇 豊平村南大鹽廣見尖石遺跡」『諏訪史』第1巻 信濃教育會諏訪部會 46頁